

長尾伸一・梅澤直樹・平野嘉孝・ 松嶋敦茂 編著『現代経済学史 の射程—パラダイムとウェルビー イング』

ミネルヴァ書房
2019年、vi+342ページ

八木紀一郎
Kiichiro Yagi
摂南大学・京都大学／名誉教授

滋賀大学経済学部で長年教鞭をとられた松嶋敦茂さんは、本書が刊行された年の7月10日に逝去された。難病による視力低下によって、40歳の頃から外出時には杖を欠かせなくなっておられたが、困難な研究条件のなかで『経済から社会へ—パレートの生涯と思想』（1985年、みすず書房）、『現代経済学史1870～1970—競合的パラダイムの展開』（1996年、名古屋大学出版会）、『功利主義は生き残るか—経済倫理学の構築に向けて』（2005年、勁草書房）の三著を世に遺された。本レビューの対象書は、松嶋さんが主催していた研究会の参加者に、松嶋経済学史に共鳴した塩沢由典さんを加えた14名によるアンソロジーである。

評者は1980年代半ばから20年近く、田中真晴京都大学名誉教授を中心にして開かれていた研究会（方法論研究会）で定期的に松嶋さんにお会いしていた。配布資料を受け取ると、それを顔に押し当てるようにして読まれ、読み終わるといつも破顔一笑されて感想を述べられた。この研究会の幹事は田中秀夫さんで、京都大学吉田キャンパス南の楽友会館を会場にした研究会が終わったあとは、ご自分の車で松嶋さんを京都駅まで送られるのがつねであった。滋賀大学の同僚であった梅澤直樹さんも同乗され、松嶋さんが乗られる電車を奥様に電話で伝えられていた。私もしばしば田中車に便乗させていただいたが、車内は上機嫌の松

嶋さんの独演会であった。そのなかで読書を補助する機器やコンピューター・ソフトの使い具合についてもうかがったこともある。最後まで研究者としての誇りをもって、人生を全うされたことに深く敬意を払います。

日本は経済学史の研究が伝統的に盛んな国であると言われるが、現代経済学史の研究が本格的にはじまったのは1970年代ではないだろうか。それまでは、限界革命後のいわゆる近代経済学の歴史については、欧米における通史にしたがって主要学説を現代に至るまでたどるのが通例であった。そこでは、過去における学派間の対立は理論の発展によって解消され、諸学説を総合した現代の経済学になっているという見方が支配的であった。しかし、この領域に進出した当時少壮の研究者たちは、まずそれぞれの学者、学派の独自の知的世界の解明に向かった。松嶋の第一作は、そのなかから生まれた最も早いモノグラフの一つであった。この著作は、現代の経済学者には「パレート極大（オプティマム）」の一語で僅かに知られているだけのヴィルフレッド・パレートを、経済から社会への視野をもって行為の合理性と非合理性を探求した思想家として再生させた。

第二作は、パレートもそのなかに属していた「現代経済学」のパラダイムをそれ以前の「古典的パラ

ダイム」に対立させて捉えた現代経済学史である。先に言及した通史的な理解とは対照的に、松嶋は経済学の歴史においても、異質な「パラダイム」の出現・既存のものとの交替というトマス・クーン的な「科学革命」があるとするが、経済学においては交替が完全におこることはなく、対立するパラダイムの併存が持続するという「修正クーン・モデル」を提起した。この著作における「古典的パラダイム」と「近代的パラダイム」の対比は、今回の書評対象書の第1章の基本枠組みとなっている。

評者はこの第二作を書評したことがある¹⁾が、ここでは、この書の終章で新たな「現代的」パラダイムへの探求が示唆されていることに注目した。松嶋の提言は、「社会的再生産システム」としての経済という「古典的パラダイム」を基礎にして、それを原子論的な合理主義的な人間論から解放された社会学的な人間論と結合させることであった。今回の『現代経済学史の射程』第1章では、そのような方向は「現代的」パラダイムの探求とは呼ばれていないが、それでも「活動」、「時間ないし不確実性」、「倫理学と経済学」と項目をあげて現代的な人間論を構想する際の留意点を示している。

第三作で松嶋が経済倫理学に向かったことには、どのような意味があったのだろうか。松嶋はこの著作の「あとがき」で、第一作後の研究テーマとして「功利主義の体系的検討」を択んだと述べていた。そうすると、この選択は経済学における「古典的」パラダイムと「近代的」パラダイムを対比した第二作とどのように関連していたのかという疑問が頭をもたげてくる。評者の暫定的な解釈は、松嶋の「功利主義」あるいは「経済倫理学」は、「行為」とその結果のみにかかわる個人主義的な判断基準ではなく、「制度」として集团的に受容可能な「一般的ルール」の成立根拠を問うものであって、その意味で経済学の現代的な展開において不可

欠であると考えられたのだろう、というものである。「一般的ルール」は制度的枠組みを構成するとともに、個人に内面化されて行為の倫理的要素を形成する。「社会的再生産」を想定する「古典的」パラダイムの現代化を企図する場合にも、「近代的」パラダイム時代の探求を含めて、行為の動機と制度あるいはルールの理解とが結びつかなければならないというのであろう。

依頼された本の書評に入る前に、松嶋の三部作に紙幅を取り過ぎた。しかし、松嶋による（梅澤直樹さんによる編集の手が入っているが）序章と第1章を理解するに際しての参考になれば幸いである。私が今回、これらの章から知ったことは、晩年の松嶋がアリストテレスからはじめて経済（学）における「活動」の位置づけを総覧しようとしていたこと、時間と「不確実性」の問題を重視していたことである。この2点については、もっと詳しい議論を松嶋から聴きたかったと思うが、もはやそれは叶わない。しかし、本書では吉川英治による第12章と齋藤隆子による第9章がこの問題を取りあげている。

松嶋の現代経済学史観に直接答えようとしているのは、塩沢由典による第2章「経済学革新にとって学説史はいかなる意義をもつか」と、長尾伸一による第3章「経済学の生成」および第15章「経済学の本質とその未来」である。塩沢は、松嶋学史が個々の学説の変遷ではなく、「2つの競合する流れ」として現代経済学史を捉えたことを高く評価する。現代のアカデミズム経済学の個々の学説への批判にとどまることなく、「古典的」パラダイムを総体として現代的に復活させることが必要だと考えているからである。本書では、スラッファ価格理論をめぐる諸論点をとりあげた平野嘉孝による第11章「〈古典〉的パラダイムにおける価格理論の意義とその分析射程」が塩沢に与している。

1) 八木紀一郎『経済科学』（名古屋大学）第44巻第4号（1997年3月）135～139ページ。

それに対して長尾のスタンスは微妙である。長尾による第3章はアリストテレス以降の知的伝統の中から「モラル・サイエンス」として経済学が生まれてきたことを叙述するが、それが「古典的」パラダイム、「近代的」パラダイムとどう関連しているのか不明である。長尾の立場は、第15章でより明確に示されていて、第一には、各時代、各潮流の経済学の性格の理解においてはモデルとなる科学観が重要であること、第二には、法則決定論的なコアをもつ「パラダイム型」経済学と異なった「非パラダイム型」の経済学が存在すること、そして第三には、将来の課題は既存のディシプリンとしての経済学を超えて「生命」と「知性」の「エコノミー」の探求に向かうべきである、という三点が示されている。塩沢が明確なコアをもつパラダイム型の経済学（現代古典派経済学）を志向しているのに対して、長尾の場合には、経済学史も科学の知性史に解消されているように思える。

塩沢の立場は、需要・供給による価格決定を理論化した近代的理論に対立するリカード的な生産費価値説に立った古典派理論の現代化である。塩沢は、近年、J・S・ミルの相互需要による国際価値決定論以降、新古典派的な価格論で占められていた国際価値論の領域で生産費価値説を復活させた²⁾が、さらに一步を進めて、高度産業社会（資本主義経済）に対応した一般の価値論においても、価格調整ではなく数量調整をとまうマーケット型の価格決定がより適切であると論じている。塩沢は、松嶋が「古典的」パラダイムの側に数えているマルクス学派、スラッファ学派にも、価格による需給調節論の混入が見られることを警告するほど非妥協的である。評者は価値論は投下労働価値と限らず再生産基準で考えればよいと思っているので、再興される現代古典派の価値論がリカード的な生産価格論になることにも拒否感はない。

しかし、価格による需給調整が中心になる市場経済も多く存在するであろう。

本書第2章では、塩沢は最新の英語版共著ではなく、日本語のオンライン雑誌論文をベースにして、その主張を要約している³⁾。塩沢による生産費価値説の復権は、ラカトシュの用語を用いればコア部分の補強になると思うが、英語版共著では在庫管理を主要手段とした数量調整のロバストネスという防御帯（森岡真史・谷口和久によって開発された）とともに示されている。私は、塩沢による国際価値論も含めた古典派価値論の復興を近年の経済理論における画期的な成果と考えているので、塩沢が松嶋の経済学史によって鼓舞されたことを経済学史研究者の一人として嬉しく思う。しかし、松嶋による第1章、また本書の他の諸章との関連で言えば、塩沢がこれまで表明してきたような、たとえば英語版共著の第1章にその片鱗がみられるような、行為理論・制度理論が紹介されたならば、本書は内容がより噛み合ったものになったであろう。ともあれ、塩沢理論の検討はこのような論文集の書評の枠内では不可能である。

松嶋のいう「古典的」パラダイムに関連した章は、平野第11章のほか、第5章のリカード貨幣論（岡田元浩「リカードウの貨幣経済論とその史的意義」）、第14章のマルクス、ポランニー論（梅澤直樹「現代社会の課題と異端の経済学」）、さらに「古典的」パラダイム時代の経済社会論に視野を拡げた第4章のファerguson論（福田奈津子「アダム・ファergusonの商業観」）、第6章のJ・S・ミル論（川名雄一郎「J・S・ミルにおける経済と倫理」）であろう。それに対して、第7章のワルラス論（御崎加代子「稀少性と科学的社会主義」）と第8章の選択合理性論（田中啓太「近代的パラダイムと選択の合理性」）は、「近代的」パラダイムの内部での探求をとりあげている。

2) 塩沢由典『リカード貿易問題の最終解決—国際価値論の復権』(岩波書店、2014年)、Shiozawa, Y., Oka, T., and Tabuchi, T., eds. *A New Construction of Ricardian Theory of International Values*, Springer, 2017.

3) 塩沢由典「現代資本主義分析のための原理論」『宇野理論を現代にどう活かすか Newsletter』II-20, (2017)、英文共著はShiozawa, Y., Morioka, M., Taniguchi, H., *Micro-foundations of Evolutionary Economics*, Springer, 2019.

そして、二つのパラダイムに分けられない数章が残る。第9章のケインズ『確率論』（齋藤隆子「モラルサイエンスにおける不確実性と合理性」）、第10章の社会的選択論（西本和見「合理的選択と社会性（ソーシャリティ）」）、第12章の「活動」論（吉川英治「モラルサイエンスとしての経済学における〈活動〉の観念」）、第13章の「システム」論（表弘一郎「フェアな世界内政か、システムの監察か」）である。これらのトピックは、松嶋の晩年の関心領域に重なっている。その探求が松嶋パラダイム論の枠を超えることになっても、あるいは長尾が期待するようにディシプリンとしての経済学の枠を超えることになっても、それぞれに本格的な成果が望まれる。

この書評で、諸章の内容に立ち入った批評をおこなうことができなかったことをご海容いただきたい。諸章のそれぞれが、松嶋が撒いた種子が咲かせた花であるように思える、と最後に述べて閉じさせていただく。